

## 故 John Henry Stape 教授を追悼して

社本雅信

ステープ先生の余命が宣告されてから半年以上経過したときには、あれは医者の方針で違っていたなと自分に言い聞かせたものだったが、2016年6月半ば過ぎ、明るい日が差し込む、バンクーバー市内のスタンレーパークを見下ろすマンションの一室で、伴侶、友人、英文学者から成る総勢15人の人々に看取られながらお亡くなりになった。臨終に際してもまったく慌てず、それどころか、あの世への旅立ちを自身の‘memorial event’とみなし、息を引き取る時間まで設定していらしたというから、先生独特のユーモアのセンスに裏付けられた泰然自若たる態度には感嘆せざるを得ない。

私とステープ先生との交流は、彼が京都大学で大学院生たちを指導していた1997年の春に始まる。記憶に間違いがなければ、奥田さん、設楽さんから誘いがあって、京大の研究室に出かけた。研究室には十名近い Joseph Conrad 愛読者が集まっていた。博士課程に在籍していた宮川美佐子さん（現、福岡女子大学教授）と、田中賢司（現、海技大学校教授）の姿もあった。これを機に、私は月に一度京都へ下り一泊して自宅に帰るということを作りかえた。

そのうち、「万策尽きて (*The End of the Tether*)」がとり上げられることになった。この作品は、私が中央大学に勤務していた三十二歳当時、友人の武谷紀久雄さん（当時、成蹊大学に勤務）や高山利政（当時、埼玉大学に勤務）さんといっしょに、渋谷のとある喫茶店で読んだことがある。その時から二十五年の歳月が経過していたので、懐かしさもひとしおで、ステープさんの作品解釈、登場人物批評、シンガポールを中心とした海峡植民地に関する解説を傾聴した。そして私は「万策尽きて」の翻訳を思い立った。

この年の九月、ステープ先生が日本での六年間におよぶ滞在を終えてカナダへお帰りになるというときに、私たちは京大の近くの日本料理店でお別れ会を開いた。先生は京都の文化にすっかり溶け込んでいらして、料理に舌鼓を打ちながら、湯豆腐のおいしさ、湯葉の繊細な味をうれしそうにお話になった。パーティーが終わりに近づいた頃、先生に『万策尽きて』の翻訳を一年で完成させられないかね、楽しみにしている」と話しかけら

## エッセイ

れた。先生の言葉を励みに、2006年に『万策尽きて ほか一編』（リーベル出版）として世に送り出した。2007年5月、英国のコンラッド協会がコンラッド生誕150周年を記念して年次大会を7月初旬ロンドンで催した折、私はこの本を携行しステープ先生と英国コンラッド協会に手渡した。

その後、私たち日本コンラッド協会は、ステープ先生の学恩に報いるべく、*The Cambridge Companion to Joseph Conrad* の日本語版製作に着手し、2012年『コンラッド文学案内』というタイトルをつけて研究社から発行した。

ステープ先生は、ケンブリッジ版 *Joseph Conrad* 全集、英国 *Joseph Conrad* 協会発行の学術雑誌 *The Conradian* の編集者として永く後世に記憶されるであろう。ステープ先生という面倒見の良い指導者に恵まれたからこそ、いまの日本コンラッド協会がある。ご生前のお姿を偲び、心からご冥福をお祈りいたします。 <2018年1月31日 記>

(しゃもと まさのぶ 電気通信大学 名誉教授)